



JOCA Kyushuだより

特定非営利活動法人九州海外協力協会
Japan Overseas Cooperative Association of Kyushu

冬のコートとさよならして春の日差しが心地よい季節になりましたが、東北関東大震災の被災者の皆様の苦難を思うと春の到来を素直に喜ぶ気持ちにはなれません。直接的な支援は出来ませんが、苦難を共に分かち合いながら、1日も早く復興するよう支援の輪を広げてまいりたいと思います。

一昨年から行なわれてきた政府の事業仕分けで、ODA事業も仕分けの対象になり、厳しい評価を受けておりますが、今回の大震災では、これまでわが国が国際協力、国際支援に関わってきた多くの国々から「今回は自分達が日本を支援する番だ」と有難いメッセージと支援が届いています。厳しい国の経済状況を思えば、無駄は省き、改める所は改めなければなりません。近視眼的なODA予算の削減が事業の後退になり、これまで培ってきた諸外国との友好関係に影響を及ぼさないことを祈る思いです。そんな中、22年度第4次隊のボランティアは、国内の惨状に後ろ髪を引かれる想いを抱きながらも、「支援してくれている赴任国に恩返しをするんだ」と国際協力の最前線に旅立って行きました。災害復旧や任国で頑張っているボランティアにエールを贈りたいと思います。

平成22年度 春 インターンシップ

2月から3月にかけて、3人のインターンシップ生が(特活)九州海外協力協会にやってきました。

青年研修事業や、エッセイコンテストの表彰式などさまざまな業務で活躍してくれました。これからの活躍が楽しみです。(山本)

結城 潤 (2月16日～2月26日)

コンテスト準備などを通して、一つのことを成すためには事前の周到な準備と、多大な苦勞を伴うことを知りました。また、研修員交流プログラムや青年研修

では、様々な国の研修員の方と接することで自身の英語を試し、コミュニケーションを図る機会を頂けただけでなく、日本そして福岡の文化や制度をいかに他国に伝えているのかを客観的に知ることができた貴重な体験となりました。



丸岡 悠美 (2月23日～3月9日)

アフリカの理数科の先生が日本の教育現場を見学されるということで、学校を訪問したり、クバーラ大会に参加したりなど内容の濃い研修でした。クバーラ大会は準備などもさせていただき、とても興味が湧きました。私自身、この2週間で沢山の課題ができました。この課題を自分のものにし、将来に活かしていければと思っています。



村上 麻理子(3月17日～3月31日)



この2週間、協力隊の説明会やJICA九州に行ったり、職員会議に参加したり、学生では体験できないことを沢山行い、自分に足りない物や将来の事等考えさせられました。今回学んだことを学生生活で活かし、社会に出る前に足りない力を身につけたいと思います。

JICAボランティア 春募集延期&募集説明会中止のお知らせ

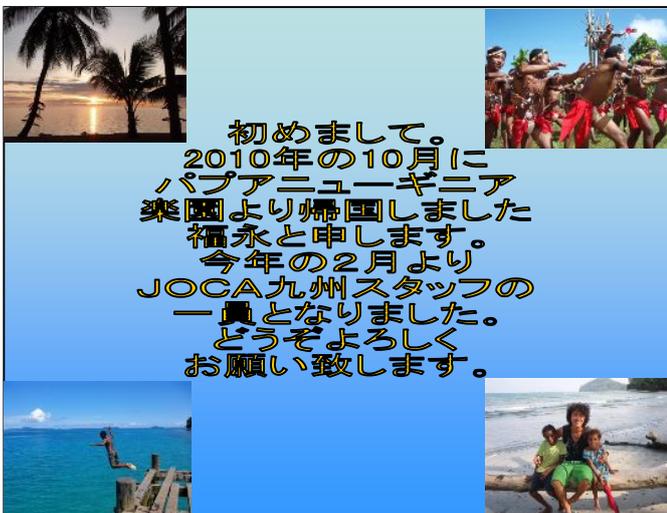
この度の東北地方太平洋沖地震での被災が甚大であること、また、広範囲にわたる計画停電が実施されていることに鑑み、4月3日(日)より九州各地で予定しておりました平成23年度春募集の「体験談&説明会」を中止することと致しました。

直前の中止決定となり、誠に申し訳ありませんが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。なお、春募集そのものは延期の措置がとられておりますので、最新の情報をお知りになりたい方は、JICAボランティアウェブサイトでご確認ください。(http://www.jica.go.jp/volunteer/index.html)

特定非営利活動法人九州海外協力協会
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前3丁目28-4 陣内ビル2F
TEL:092-415-6536
E-mail:ngoqshuint@joca-kyushu.or.jp

〒812-0011

料金後納
郵便



初めまして。
2010年の10月に
バブアニューギニア
楽園より帰国しました
福永と申します。
今年の2月より
JOCA九州スタッフの
一員となりました。
どうぞよろしく
お願い致します。

~JOCA Kyushu新年度挨拶~

日頃より九州海外協力協会にご支援・ご協力をいただき誠にありがとうございます。昨年度は皆様のお陰を持ちまして活動することができました。今年度も更なる飛躍に努めお役に立てますよう事務局一同頑張ってお参りますのでどうぞよろしくお願い致します。

発行 特定非営利活動法人九州海外協力協会

〒812-0011
福岡市博多区博多駅前3丁目28-4 陣内ビル2F
TEL:092-415-6536
FAX:092-415-6518
HP: http://www.joca-kyushu.or.jp/
E-mail: ngoqshuint@joca-kyushu.or.jp

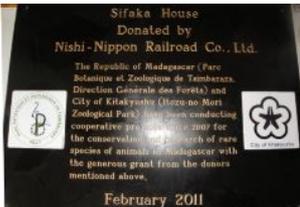


マダガスカル事業調査報告



平成23年2月8日から14日まで、22年度最後の現地調査に行ってきました。今回の調査団は到津の森公園の岩野園長、延吉飼育員と3人でした。ミッションの内容は、ついに完成したシファカ飼育繁殖施設の落成式、キツネザル飼育研修、輸入動物導入の詳細の確認を主にやってきました。シファカ施設の落成式にはマダガスカル側より高等教育省の大臣、環境森林省の総局長、チン

バザザ動植物園の園長、日本側より川口特命全権大使、笹館JICAマダガスカル所長、大豊建設の原田所長にご出席いただき総勢80名ほど集まりました。プレスも多く取材にきており、テレビや新聞にとりあげられました。掲載された記事によると、今回の飼育施設はマダガスカルにおいて最大級の施設とのこと。また、式典後、関係者との話し合いによって輸入動物導入(キツネザル類)についても大きく進展し、23年度はその手続きを開始する予定です。(田淵)



施設引き渡し式



テレビで放映されました!



カンムリキツネザル

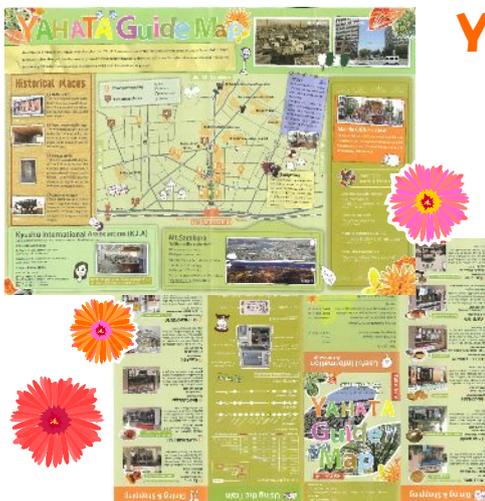


協議の様子

「学んで、遊ぶ。マダガスカル教室」

到津の森公園では今年の春マダガスカルゾーンがオープンします。子どもたちにマダガスカルのこと森林破壊のことをさらに知ってもらうべく写真展や環境教育ワークショップなどの取り組みを行なっています。

3月26日(土)、到津の森公園と共同で、マダガスカル環境教育用の教材を作成しました。当日は、一般公募から15人の小学生が集まり、世界の環境問題やマダガスカルの動物のことを学びました。シファカの横飛び動きをとり入れたダンスをして楽しみながらマダガスカルを感じる二時間となりました。最後に、子どもたちから動物を守るためになにができるか訊いたところ、「食べ物のをこさない」「水をだっしぱなしにしない」といった意見を出してくれました。(田淵)



YAHATA Guide Map 出来上がりました!

北九州市立大学の学生と八幡駅前開発株式会社、そして当協会スタッフが作成した八幡英語マップが2年ぶりにリニューアルされました。今回は、学生の意向により、50年前の八幡の様子や有名な建築物、寺院などを紹介しています。また電車の乗り方や簡単な日本語も掲載し、日本に住む外国の人たちがより住みやすい街を目指し作成されました。学生自身がJICAに滞在中の研修員と街歩きをし、マップ作りのヒントをもらったり、八幡のお店を一軒一軒訪ね資料収集をしたりと、全てが手づくりのマップです。完成したマップは、八幡駅、JICA九州センター、北九州国際交流協会などで配布しています。八幡に来る際は、ぜひこのマップを利用して海外の人と一緒に歩いてみてください。きっと新たな八幡が発見できます!(後藤)

H20-3次隊 相蘭 泰文SV

職種: 花卉 福岡県在住

ウルグアイは南アメリカ南東部に位置



”私はウルグアイでシニア海外ボランティアとして計4年間生活をし、平成23年1月に帰国した。初回はモンテビデオ近郊の現地NGO施設(貧者を支援する施設)で野菜栽培の指導。現地、日本大使館が管轄する”草の根支援”を長期交渉の末受け取る事ができ、それが基礎となり施設が大きく充実発展する機会となった。帰国パーティーで多くの人が涙を流してくれたのが忘れられない。

”2度目はモンテビデオから北東400キロに位置する人口4万5千人のメロ市である。ここでは県庁の緑化推進部に入り花卉類を育て公園や道路に植栽する仕事である。

地元婦人部へ花栽培の指導や野菜栽培もした。大使がわざわざ視察にきてくれたのが大変うれしかった。

”4年間を通して苦労は多々あるが、やはり一番は語学(スペイン語)。取り分け語学音痴の私は通常の生活では差ほど不便は感じなかったが、私の夢であった「全ての事に対して広く深く心のひだまで語り合うこと」は叶わなかった。 ”ウルグアイは西欧からの移民国で90%以上が白人である。食文化を含め全ての面で日本とは程遠い物があるが、ゆったりとした生活を見ていると人間にとって何がほんとうの幸せかいつも考えさせられた。



【日本から送ってもらった遊具等の贈呈式】

に係わる地域グループはあったものの、その活動は活発ではなく、またDAC Officeも各グループがどのような活動を行っているかをほとんど把握していませんでした。そのため、国から年間の活動予算が下りても、使われずに返金するという状態が続いていました。

これらを改善するために、活動の目標を地域グループの自立、DAC Officeと地域グループとのスムーズな連携に決めました。

活動の際に一番とまどいを感じた事は、時間の感覚の違いでした。1時間遅れて会議が始まることは普通でしたし、イベントの準備が間に合わず、当日の朝まで調整に走り回る事もありました。そんな中、いつも慌てふためいている私に「ボツワナでは時間がない、という事はないのよ!!」という赴任先のスタッフの言葉に最初は怒りを覚えました。次第にボツワナ人のペース

”私は24歳の時に青年海外協力隊としてフィリピンに農業機械で参加する。今から40年前でその時見た貧富の差が今でも目に焼きついている。それから35年の時を経て南米に飛び込んだ。青年海外協力隊が私の人生の原点の様に思えてならない。その時以来、南北問題について考える様になり又永遠のテーマである人間について、人生とは、そして生死、宗教等々について日本で生活していた時の数倍は考える事が出来た様に思う。 ”青年海外協力隊経験者もシニアに参加された方も二年間現地で活動する中で日本、世界についてそれぞれの立場で多くの事を考え感じられた事と思う。この体験をベースにした発言や行動は現在多くの問題を抱え、もがき苦しんでいる世界を少しでも良い方向に導いて行く原動力になる事を私は確信する。

で行う事の必要性に気づかされ、日本人の価値観にとらわれないように心がけました。

ボツワナは他のアフリカの国々と比べると、ダイヤモンドが採掘されるため経済が安定し、国民性も大らかでのんびりしています。しかし、家庭内暴力や男女間格差、貧富の差、HIV感染率の高さなど解決すべき問題はたくさんあり、立場の弱い子供たちや女性たちが被害にあっているのが現状です。そのような日常のなかでも、彼らの日々を楽しむ姿やいつも笑顔で絶やさぬ人々の強さに心を打たれました。また、温かく受け入れてく

れた赴任先やジュワネンの人々に感謝し、第二の故郷が出来たと感じています。



【イベントの写真】

H20-2次隊 大地 裕子OG

職種: エイズ対策 熊本県在住

ボツワナは南部アフリカの内陸に位置



平成20年9月から平成22年12月までの2年3か月、私はボツワナ共和国でエイズ対策ボランティアとして赴任していました。赴任したのは首都から約200キロ離れたジュワネンという町で、ダイヤモンド鉱山があり、採掘業が盛んで、ボツワナの経済を支えています。

私の配属先は地方自治省管轄のDAC (District AIDS Coordinating) Officeでした。赴任した当初、いくつかのHIV/AIDS



【活動先のユースグループメンバーと】